

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

生活文化史

<史料館だより>

目 次

- ◇神戸市東灘区旧本庄村深江の葬制
—大正時代から昭和初期にかけて—…………… 望月 浩 2
- ◇史料館の小学校団体見学について…………… 道谷 卓 6
- ◇だんじり再建に寄せて…………… 伊東 玲子 10
- ◇史料館日誌抄／資料寄贈者ご芳名…………… 12

1996. 7. 1
NO. 22



再建された深江のだんじり(1996. 5. 3撮影)▶

神戸深江生活文化史料館

神戸市東灘区旧本庄村深江の葬制

—大正時代から昭和初期にかけて—

史料館主任研究員 望月 浩

旧本庄村は、現在の神戸市東灘区の東南部にあたり、江戸時代には東から深江・青木・西青木の村があり、明治二十二年にこの三村が合併し、「本庄村」となった。そして、昭和二十五年に本庄村は、御影・住吉・魚崎・本山の四町村と共に神戸市に合併し、現在の東灘区を形成するようになった。

今回は、旧本庄村の深江地域の昔の葬制について聞き取りができたので、その内容を紹介したい。

〔葬式の名称〕

・葬式のことを、「ソーレン」と呼んでいた。これは、「葬礼」がなまったものであろう。

〔死亡通知〕

・村の人が死ぬとまず寺（正寿寺）に知らせた。そうすると寺から「寺守」と呼ばれる寺の世話をしている人が、鐘をたたいて村中を回った。その鐘を聞いた村人は、家を出て寺守に、どこの家の葬式か尋ねた。

〔お通夜・葬式・納棺〕

・葬式はほとんど各家で行なった。寺ですることはなかった。
・友引・仏滅などは考慮した。
・葬式屋はあったが、一般にはあまり使わなかった。

・葬式一切の世話は、一番親しい人が中心になって、隣近所が行なった。親戚・身内がたずさわることにはなかった。

・葬式の間の買物は、近所の人が行き、「買物帳」と呼ばれる物を持って行き、何を買ったとその帳面に書いてもらい、支払いはすべてあとで行なう。「買物帳」を見ると、どこの店も葬式の買物だということがわかっていた。「買物帳」は、半紙を2つに折り、こよりで綴ったもので、葬式の買物の時だけに使われた。

・お通夜の時には死者を入れた棺を座敷に置き、回りに花を置いた。しきびは少なかった。

・「同行衆」と呼ばれる人がやってきて、家の前に提灯を吊し、僧侶の代わりに導師をつとめ、お経をあげてくれる。「同行」とは、信徒の集まりを意味する言葉である。

・家族の者が死者の身体をふく。そして帷子とわらじをつけさせ、両手を胸の前で組ませ、その手に数珠をつけさせる。死体が硬直しないうちに手を組ませないといけない。もし硬直してしまっていたら、指の関節を折って組ませる。それぐらい硬直するものである。

ちなみに、老人で生前に腰が曲がっていた死者でも、死んで1時間ほど経つと腰が真っすぐに延びているという。

・棺は寝棺がほとんどで、座棺にすることもあったという。それは、大正始め頃まで土葬があった頃、各家の墓地の区域が狭く、寝棺だと入らなかつたためであった。

・棺の中には、死者の生前使っていたもの（杖・眼鏡など）を入れる。また、和紙に六文銭を印刷したものも入れる。これは村内の岡田さんという店で売っていた。大きい葬式の時には、木で作った六文銭を紐に通して入れていた。

〔出棺・火葬〕

・出棺の時には、死者が生前使っていた茶わんに飯を盛って、箸を



図1 大正年間の深江付近図

一本刺す。それを家の前でたたき割る。そうすると子供たちが寄ってきて、お菓子を配る。

・棺は神輿の台のような物に乗せて運ぶが、担いで家を出るときには、担ぐ人は白装束を着て、家の中でわらじを履き、そのまま座敷から外へ出る。これは、死出の旅になるからだといわれている。

・棺は、死者に一番近い身内の男性が数人で担ぐ。担ぐ人数は決まらず、火葬場が遠いので、できるだけ多くの人で担いだ。近所の人が担ぐこともあった。

・火葬場の位置と順路は三頁図1参照。

・火葬場までの行列の順番は次のとおりである。

①僧侶（寺の世話をする人が、笠を後から僧侶にさしかけた。僧侶が座る塗りの椅子をもつ人もあった）

②棺（死者に一番近い男性たちが担ぐ）

③喪主（手に位牌を持った）

④写真か骨壺を持つ人もいた。

⑤親戚・近所の人。

白装束は棺を担ぐ人だけであった。後を向くなどは言われなかった。僧侶に脇僧がつくこともあった。

・火葬は一晩行なわれた。行列は、火葬場で「オンボ（陰じり）」と呼ばれる人に棺を預けて、その日は家に帰った。「オンボ」は、普段別に仕事を持っているが、村でお金を出しあって火葬の世話を専属にやってもらっていた。火葬場はレンガ作りであった。大正三年に、住吉川の荒神山に火葬場ができるまでは、ここで火葬が行なわれていた。

・墓には、地面に埋めた骨壺の上に、墓石ができるまで木の角柱を立てていた。板もあったが少なかった。柱には、正面に戒名を書き、側面には死んだ年月日を書いた。



現在の本庄共同墓地

・子供が死んだときには、親は火葬場へ行かなかった。

・浜辺にあがった溺死体は、身元が不明な場合は役場が引き取り、いったん土葬が行なわれた。身元がわかるまで埋められたままであった。

「骨拾い」

・次の日に骨拾いに行った。骨拾いには親戚・身内だけで行った。
・オンボの人に、窯から皿に乗った死者を出してもらう。皿にはこまがついており転がして出す。出てきたお骨には、最初にのどぼとけの骨をオンボの人が箸で拾ってくれる。一般の人では、どこがのどぼとけの骨かわからないからである。のどぼとけの骨は、味噌を入れたような素焼きの小さい壺に入れる。そして再びオンボの人が、あばらか足の関節部分の骨を一つだけ（これを「ドウコツ」＝胴骨？と呼ぶ）先程の壺より大きな骨壺に入れてくれる。次に、米天人みんなが箸でつまんで入れていく。骨拾いに使う箸は、竹と木で一組にしたものを使う。二種類の骨壺は、前述の岡田さんで売っていた。
・骨拾いが終わると、その足で墓地へ向かった（図1参照）。そして、親戚・身内で墓に骨を入れる。墓地に骨を入れるのはドウコツの方だけである。

・夫婦の内の夫が亡くなった時に、妻が墓地へ行くと再婚ができなかった。再婚をする意志があるときには墓地へ行かなかった。

・のどぼとけの骨の方は、金欄の袋に入れて家に祀る。そして一周忌までに京都の本願寺へ骨納めに行く。家によってはなるべく早く行ったり、その年を越さないように行くこともあった。たいていの家では、一周忌の時に親戚が集まるので、みんなでその時に行くことが多かった。

「その後」

・墓地から家に帰ると、塩を家の前にまいて、その塩を踏んで家に

入った。

・家に入ると、僧侶がのどぼとけの骨の方にお経をあげてくれる。僧侶には、骨拾いに行く時間をあらかじめ伝えておき、時間を見計らって家の方に来てもらう。

・その晩親戚は家に泊まっていく。最初からだど泊三日するわけである。しかし、遠い親戚の人は初七日まで家に泊まる。

・初七日は、親戚・身内が集まり、僧侶にお経を詠んでもらう。皆に酒を振る舞う。近所の人でも手伝いにくる。

・忌み明けは三十五日か四十九日である。

古くは深江地域は、現在もある浄土真宗正寿寺の檀家で、そのため他地域に見られる真宗と同じ作法が葬制でも見られる。

火葬場は現在の本山南町六丁目付近にあたり、左の写真は、本庄共同墓地内に移されている明治二十四年に建てられた火葬場の供養碑である。

なお、今回の報告のためにいろいろお話を聞かせてもらったのは、磯野正三・磯辺信三・梶 正雄・中尾久一の各氏である。文末であるがお礼を申し上げます。



旧深江火葬場供養碑

史料館の 小学校団体見学について

史料館研究員 道谷卓

一、はじめに

史料館では毎年一月から三月にかけて、東灘区内を中心とする小学校三年生の団体見学の子供たちで、館内がにぎわう。小学校三年生の社会科のカリキュラムの中に、地域学習についての時間が設けられており、そのまとめとして、年度末のこの時期に、校外学習を兼ねて史料館を見学に来るのである。

昨年（平成七年）は阪神・淡路大震災（一月十七日）で、史料館も被災し休館を余儀なくされたため、団体見学の受け入れが出来なかった。しかし、復旧作業もなんとか終え、昨年十月二十二日に再開することができたため、今年も例年通り、小学校の団体見学を受け入れる体制を整えるに至った次第である。ただ、震災の影響で、どれだけの学校に見学してもらえるのか不安はあったが、ふたを開けてみると震災前とそれほど変わらない状況なので一安心というところである。

そこで、小学校団体見学について、その展示解説を担当している立場から、これまでのことを振り返ってみることにする。

二、これまでの経過

小学校三年生の団体見学は、史料館を増築した昭和五十八年（一九八三）からはじまり、最近では、年間約十校、約一三〇〇人の児

小学校	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
本庄小	42	225	210	184	241	215	181		229	215	231	178	阪神大震災の	
魚崎小	320		246		287	248	226	201	216	220	193	169	158	
東灘小		156	225		200	218	190	161	180	180	190	192	144	
福池小		158	160	128	150	130	103	109	101	113	106	105	81	
本山南小		36	*241	100		101	107	88	101	96	113	94	82	
本山第三小			156	160	145	160	127	125	123	147	146	130	108	
御影北小			204		200		166						126	
神大附属住吉小				120	120			120					39	
小野柄小				35	26								団体見学なし	
福住小				136										
小部東小							101	107	113					
春日野小								61		68	49	44		
西灘小								106	68	93				
流が森小								209	204					
摩耶小									83					
神戸臨海山小										92	93	96		
御蔵小										47				
向洋小											133	87		95
真野小											52			
六甲アイランド小												74		93
灘小												79		
神戸海星女子学院小												45		
菅の台小												75		
住吉小														128
年間入館者数	362	575	1442	852	1369	1062	1201	1287	1418	1271	1306	1368	0	1054
年間総入館者数		3747	4914	3968	3968	3050	3216	2476	2233	2233	2199	2113	111	

*3月=125、11月=116（計241）

図1 小学校三年生の団体見学者数一覧

童が見学するということで定着してきていた。当初は、史料館に近い本庄小学校、東灘小学校、福池小学校など数校の見学でスタートしたが、年を経るごとに団体見学の校数も増加し、震災前年の平成六年（一九九四）には、それまでで最多の十三校が見学するまでになったのである。これは、もともと史料館近辺の小学校に勤務されて団体見学を引率された先生が、転勤で他の小学校へ移られたことにより、今度はその小学校の三年生を引率してこられるといったケースがしばしば起こったことによるところが大きい。また、神戸市が三年生社会科の副読本として発行している『わたしたちのまち神戸 3年』（神戸市教育委員会監修）の平成五年発行版から、当史料館を掲載しており、これを参照された先生が、実際に史料館の団体見学を計画されたという場合もいくつかあった。同書の「5市の人びとのくらしのうつりかわり 1むかしをつたえるもの（2）むかしつかったもの」という項目の中に「きょう土しりょう館」（同書、五七頁）のページがあり、神戸市立博物館などともに「古い道具をてんじているところ」として史料館を外観写真とともに紹介している。こうしたこともあって、震災前には、区内のみならず、遠くは北区や須磨区といったところの小学校も団体見学に訪れる、というようなこともあったのである。

三、小学生への展示解説について

私は、これまで約十年間、小学校三年生の団体見学の展示解説を担当してきた。現在、大学で教鞭をとっているせいもあって、大学生や一般の人に向かって話すことには何の戸惑いもない私だが、いざ小学校三年生に対して史料館周辺の歴史や展示物の説明をすることは、何年経験してみても非常に困難をきわめるといのが率直な感想である。難しい内容を小学校三年生にも理解できるような言葉を用いて、わかりやすく、噛み砕いて説明する。毎年、私はそのこ



熱心にメモをとる小学生たち

とを頭にたたきこんで、小学生達を迎え入れるのである。

ここで、館内の解説の様子を追って紹介してみよう。当史料館の収容人数の問題もあり、一度に見学できる人数は百名が限度で、それを超える小学校については二班に分かれてもらい、時間をずらせて見学をお願いしている。だいたい、私の解説時間を含めて館内を見学してもらう時間は、四十五分から一時間ぐらいである。

まず、一階の展示スペースに生徒達を集めて、館のできた経緯や深江周辺の歴史を解説し、一階の展示物（今年は戦争資料を展示していた）についての説明を簡単にする。そして、二階に上がってもらい、いろいろコーナーの前で農具や漁具、いろいろの部屋に展示してある資料を、私が実際に手に取りながら、時には小学生に質問をしながら説明していくのである。とくに子供達は教科書で習ったことについては、かなり興味をしめしてくれるので、それらのことを折り混ぜながら話を進めていく。例えば、低学年の国語の教科書に「たぬきのいとぐるま」という題材が入っており、そのことを指摘した上で、展示してある「糸車」やその関連資料（かせ車や機織りなど）を説明すると、子供達は熱心に聞いてくれ、また、より理解ができるようである。

次に二階の深江北町遺跡の展示コーナー前へ場所を移し、そこで遺跡の概略を説明する。この遺跡は弥生時代の円形周溝墓群のあとで、そこから発掘された弥生土器と遺跡全体の模型をここには展示しているが、小学校三年生に弥生時代の話をわかりやすく説明するのは正直言って、相当困難であると言わざるをえない。約二千年前のお墓の跡だという説明をするわけだが、それとどこまで子供たちが理解してくれているかは未知数である。ただ、なかには歴史に興味があり相当勉強している子供もおり、「この史料館には縄文土器は展示していないのですか」とか「二千年前の土器だとして



はじめて見る踏み車や機織り

わかるのですか」というような、私をドキッとさせるようなレベルの高い鋭い質問を投げかけてくる場合もあった。

最後に、民具のコーナーへ移動して、むかし使われていた電化製品や教育資料、おもちゃなどを説明して私の解説は終わる。そして、後は子供達に館内を自由に見学してもらう時間を設け、その間に私が歩き回って、子供達の質問に答えていくようにするのである。この自由見学の時間、子供達は熱心に館内の資料を見学し、ノートに一所懸命メモをとる姿をよくみかける。

ところで、引率される先生の中には、予め下見をされ、どこにどのような資料が展示してあるのかを確認し、詳細な見学用プリントを作成し子供達に配布するという熱心な方もおられ、頭の下がる思いである。こうした先生に引率されてくる子供達は概して、自分たちの住む街の事に興味を持ち、自由見学時間中にも、多くの質問を私にぶつけてくるのである。

四、今年の団体見学から

震災の起きた昨年、実はその前年の暮れから魚崎、本庄、本山南、春日野、本山第三、六甲アイランドの六小学校からすでに団体見学の予約をいただいていた。しかし、当史料館も被災し団体見学を受け入れられるところではなく、また、予約された各小学校も被災地であり、見学は不可能ということもあり、結果的には昨年は団体見学がゼロという状況であった。

震災で亡くなられた方が神戸市内で最多の東灘区は、人口減少も激しく、震災前は十九万人いた人口も現在では十五万五千人にまで激減しているという状況のなかで、はたして、今年は小学校三年生の団体見学があるのだろうかと心配していた。昨年十月二十二日の再開にあたっては、ここ数年連続して見学にいられている小学校あてに再オーブンの案内葉書を差し上げ、団体見学も可能である

旨のお知らせを試してみた。結果的には十校、一〇五四人の見学者を迎えることができた。震災前の十三校、一三六八人という数字には及ばないが、各学校とも震災で児童の数が減少していることに鑑みれば、今年の数字は大きな意義があるように思える。

今年の団体見学の説明の際、まず最初に説明したのは地震による史料館及びその周辺の被害状況である。震災直後の館内の様子を撮った写真を展示していたため、それを見せながら話をしていった。史料館の隣の大日靈女神社の社殿が倒壊した様子や、特に阪神高速の高架が横倒しになったのがちょうど史料館の南にあたるということとを話すと、子供達の表情は真剣そのものになった。

また、震災後、被災家屋から救出した資料の展示もしていたことから、それらについての説明も行なった。ただ、資料の救出活動の重要性については、子供達には難しかったらしく、どこまで内容を理解してもらえたかはわからない。

ところで、今年の小学校の中で印象に残るのは、一月三十一日に見学に来た本山第三小学校である。特に同校三年三組(守真弓学級)のみなさんからは、史料館に、丁寧な感想文の冊子を送っていた。子供達みんなが、一人原稿用紙三枚から四枚にわたって、きれいな字で、見学の感想を書いてきてくれた。どの文章を読んでもしっかりと書かれており、また、私の説明をよく聞いてくれているなどと思う。本来なら、全員の文章を掲載したいところだが、紙面の都合もあり、そうできないことをお詫びする次第である。ただ、本山第三小学校が見学した時、たまたま展示してあったSP盤のレコード(『隣組』という歌)を子供達の前でプレーヤーにかけ実演したその時、ほとんどの子供達が実際にレコードを聞いたことがなかったらしく、レコード針が動くことに感動した子供がかなりいた。正直言って、このことは私にとって一種のカルチャーショックに近い

ものを感じた。今の小学校三年生がものごころついた頃には、レコードが世の中から消え、CDに替わってしまったのである。レコードもすでに過去の遺物となったのかということが、その時私の脳裏をかすめた。前述の感想文の中にも、ある児童が「レコードは、うたがおわりにちかづく」と、まん中の中心のところをどンドンちかづいていくからおもしろいし、私にとってはすごい発見だった。」と書いてある。

五、おわりに―今後の課題―

これまでの史料館の小学校三年生団体見学について、思いつくまま述べてきた。団体見学が一段落した頃、今度はその時にきた子供達がお父さん・お母さん方と一緒に見学に来るという光景がしばしばみられる。そういう意味では、この三年生の団体見学というのは史料館の普及活動にとってたいへん重要なことであるように思えるのである。

今後、小学校は完全週休二日制へと移行するが、その際、史料館の開館日が土曜・日曜だけであるということが三年生団体見学のネックとなつてこよう。現在の月二回の土曜日になった際、残り二回の授業のある土曜日だけで団体見学をさばくことは困難になったため、金曜日にもできるだけ見学してもらえ体制をとつてきた。今後は金曜日の午前と午後を利用し一日で二校ないし三校を受け入れるといったことも考えていかねばならないであろう。ただ、当史料館の館員は他に本来の仕事を持ち、土曜・日曜の休日を利用して館の活動を行なっているという事情もあるため、平日の団体見学受け入れについては、百パーセント希望にそえるというまでには至らないという点をどうかご理解いただければと思う。

来年、今年以上に多くの三年生が見学にきてくれることを願ってやまない。

だんじり再建によせて

史料館研究員 伊 東 玲 子

昭和二十年の空襲で焼失した深江のだんじりが、五十年ぶりに再建された。

だんじりは毎年五月三日と四日に行なわれる卯の葉祭りうのばまつりで曳くものである。四日の本宮において、森稲荷神社から大日神社へ渡る神輿かみかみの先触れとして、半鐘や鉦や太鼓の音頭とともに、三十五人ほどの若仲わかなかつと呼ばれる男たちが深江の陸（オカ）や浜（ハマ）を曳いていく。

だんじりを空襲で焼失したあと、他の地区から借りて曳いていた時期もあったが、祭りを支える組織であった若仲の解体とともに、昭和三十年代に入って卯の葉祭りは行なわれなくなった。

しかし祭りを再興したいという深江の人々の熱意が実り、昭和六十年の神輿昇かみかみきを始めとして、岸和田のだんじりを借りてのだんじり曳きも再開された。

また子供だんじりと子供みこしも作られ、小中学生も祭りに参加することができるようになった。毎年の練習の成果もあって、今では鳴り物や伊勢音頭も立派にこなし、祭りに花を添えている。

そして平成五年より、ついにだんじりの再建が始められた。淡路島の津名町の梶内だんじりかぢうちだんじりが製作されただんじりは、阪神大震災を乗り越えて、その勇壮な姿を平成八年五月三日の祭りで披露した

のである。

だんじり正面にはエビスさま、後にはかつて深江の浜で行なわれていた地引き網の光景が彫られている。網をひく人々の目が網を見据えて真剣そのものであるのが、かつてを偲ばせる、貴重な彫刻である。

また側面には、稲荷神社の象徴であり、豊穰を表わす稲穂と、大目を表わす巴、大漁を表わす千鳥が彫られている。

そして句欄（くまな手すり）にはめこまれた彫刻は、阪神大震災とそこからの復興を象徴している。木が倒れ火に追われた動物たちが、助け合い、そしてついに森へ戻ることができるまでを描いたこの木彫りは、大震災を忘れず、そして一刻も早い復興を祈る深江の人々の心を表わした素晴らしいものである。

また日展審査員善本秀作氏によって製作された鬼板は、だんじり正面に据えられ、穏やかな表情で人々を見下ろしている。

震災によって家屋の多くが全半壊し、深江の人口はほぼ半分になった。

しかし声を枯らしてだんじりを曳く若仲の人や、交通整理や休憩場所への飲み物運搬に奉仕する世話人や、暑い中で体力を使う男たちのために食事の用意をする女性たち、子供神輿や子供だんじりを曳いて可愛い声や元気な鳴り物を響かせる子供たち、そしてなにより力強い「とばせ」や力を合わせた「曲がり角」に拍手を惜しまない人々がいてくれる。

そして、だんじりが止まっている時は鳴り物をゆっくり叩いて曳き手を休ませてやる、他の地区のだんじりが来た時は、景気付けのためにテンポを早めて「宮入り」を叩いて迎えるといった、言葉や練習では絶対に伝わらないものを、伝えていくことができることになった。



来年は深江が神輿のかき番である。神輿と深江・森・青木の三台のだんじりが勢揃いするところを、絶対に見なければならぬと思っ

勇壮な姿を見せるだんじり

史料館日誌抄 ～阪神・淡路大震災以後～

<平成7年>

- 1月17日 阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）発生
 1月19日 館員が震災後はじめて館内に入り、被災状況を確認する。
 1月28日 館内の復旧作業に着手する
 2月17日 館内の水道が通水する。この日から開館相当日（週末）に、定期的に復旧作業を行なえる態勢になる。
 3月4日 館内のガスが復旧する。
 4月23日 震災後はじめての調査研究会。
 本山北町・小林家の被災資料を救出し、寄贈を受ける。
 7月1日 御影本町・山本家の被災資料を救出し、寄贈を受ける。
 7月16日 調査研究会で、再開時期を10月22日(日)に設定する。
 7月31日 史料館友の会、解散する。
 8月5日 住吉本町・走尾家の被災資料を救出し、寄贈を受ける。
 9月9日 森北町・藤本家の被災資料を救出し、寄贈を受ける。

- 9月24日 調査研究会で、再開に向けての最終打合せを行なう。
 10月21日 館内復旧作業完了。
 10月22日 再開館。
 11月19日 神戸市広報番組・AM神戸「サンデー神戸」で、史料館が紹介される。

<平成8年>

- 1月19日 東灘小学校 3年生（見学者 144名）
 1月20日 魚崎小学校 3年生（見学者 158名）
 1月31日 本山第三小学校 3年生（見学者 108名）
 2月3日 福池小学校 3年生（見学者 81名）
 向洋小学校 3年生（見学者 95名）
 2月9日 本山南小学校 3年生（見学者 82名）
 2月16日 住吉小学校 3年生（見学者 128名）
 2月17日 御影北小学校 3年生（見学者 126名）
 2月23日 六甲アイランド小学校 3年生（見学者 93名）
 2月25日 近畿民具学会（見学者 14名）
 3月2日 神大附属住吉小学校 3年生（見学者 39名）
 （文責 道谷）

●資料寄贈者のご芳名（阪神大震災以後、敬称略）

△小林存▽唐箕、踏み車、田植棒、牛の鞍、熊手、唐竿、俵あみ台、千歯こき、麦かき、鍬2点、ふるい、雁爪、手かき、たがね、はつり、七つ重盃1組、箱枕2点、盆、湯呑み8点、ふた付碗9点、碗1点、碗（小）11点、小皿1点／△走尾雄▽天びん棒、茶たく13点、しりがせ、牛の鞍、鍬／△山本豊▽九谷焼の徳利、水さし、炭入れ、酒かん器、碇子、模様ガラス／△藤本博▽医療器具（吸引器）、化粧道具、コップ、せいろ、もち箱3点、電燈、うちわ25点、かご15点、ちゃぶ台、羽子板2点、ヘルメット、釜2点、桶9点、たらい、ぞうり3点、下駄3点、湯呑み（隣組）の歌詞付き）8点、ラジウム温灸器／△寺田匡宏▽刺子の法被、外套、頭巾／△磯野彰▽バケツ（木製）、つづら／△藤川耕策▽ミシン2点、編み機、七輪、鉄びん、火鉢、映写機／△杉浦昭典▽レコードプレーヤー、急須／△藤川祐作▽きぬた／△今林澄子▽たばこ入れ2点／△岡田博達▽燭台／△津村容子▽ケートル、真空管、正月飾り、箱枕、前かけ4点、人形

どうもありがとうございました。

編集／望月 浩
 『生活文化史』 第22号 96・7・1
 発行／神戸深江生活文化史料館

〒658 神戸市東灘区深江本町3-5-7
 ☎ 078-453-4980